

中部大学 理学教室

COLLOQUIUM

# 談話会

中部大学理学教室では、教室内外における自然科学研究教育の最前線を専門外の方にも分かりやすく紹介し、語り合える場として、「理学教室談話会」を通常月1回ほどのペースで開催しております。参加は自由です。参加予約等も特に要りません。学生の方も含め、学内・学外の多くの皆様のご参加をお待ちしております。

2006年5月 中部大学理学教室

～ 第10回講演のご案内 ～

日時: 2006年5月24日(水) 15:00～16:00 中部大学 10号館 1033室

タイトル: 地球環境論 — 持続可能な開発

講演者: 中部大学工学部理学教室 教授 鈴木 國弘

## アブストラクト

「成長の限界」(メドウズ等,1972) 曲線は、マルサス人口論(1798)「人口の幾何級数的増加は、食糧生産の算術的成長を追い越して、飢饉、疫病、戦争によって抑えられるしかない」という悲観論を思い出させた。悲観的予測は、多くの非難に晒されたが、それ以降の30年の歴史的推移においては否定し得ない。メドウズ等は、もはや人類は終わりだということではなく、「人口と生産の制御不可能な破局」、あるいは「持続的な発展のための自主的な成長の抑制」の二者択一であると主張する。再生可能な資源の範囲では、物質的な成長を諦めて、精神文化的発展を目指すとしている。

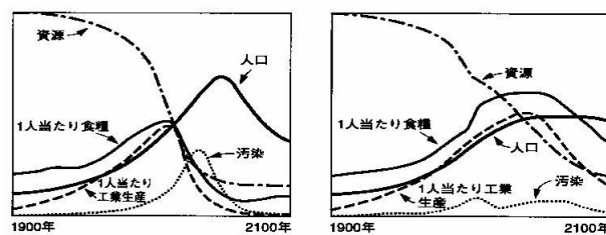


図1-3 メドウズの世界予測データ [大来佐武郎監訳、「成長の限界」, p.105, 152, ダイヤモンド社(1975)より]

現代の化石燃料の工業文明は、大規模集中型である。貧富の差、大量消費、競争社会、生態系の破壊、人類生存の危機をもたらしている。他方、持続可能な世界を想像させてくれるのは自然エネルギー文明である。自然エネルギーは生態系が保全されている限り、再生が可能である。自然エネルギーを利用すれば、莫大なエネルギーであるが、それは地球全体に分散されている。この低密度の、小規模分散型エネルギーを各地域の風土の特徴を生かして、生態系を破壊することなく利用するのが、持続可能な開発である。自然エネルギー文明を拓くのは、バイオマスではないだろうか。その時、人々も植物達に学び、消費のスタイルを変える。

次回6月には理学教室 小林 礼人先生の「交換しない数の指数」という題での講演を予定しております。

ご意見お問い合わせは: 淵野 (fuchino@isc.chubu.ac.jp) まで